一橋大学体育会バレーボール部
第３回海外遠征（シンガポール）報告書
（２０１４年８月３日～９日）

文責：商学部４年　主将　槌尾啓

法学部２年　　岡田健吾

～目次～

Ⅰ．遠征内容

１．日程
２．参加者
３．交流先
４．練習・試合場所
５．宿泊場所
６．全体日程
７．日程詳細
８．市内見学報告
９．如水会シンガポール支部（三井物産シンガポール）表敬訪問報告
１０．リトルインディア見学報告
１１．ＮＵＳキャンパスツアー報告
１２．ＮＵＳバレーボールクラブとの交流試合報告
１３．日本大使館・竹内大使面談報告
１４．ＮＵＳバレー部員との交流討論会報告
１５．ＮＵＳバレー部員との懇親夕食会報告
１６．班別自由行動報告
１７．Yale-NUS College 学生との交流会報告
１８．ナイトサファリ見学報告（有志自由参加）
１９．マリーナ地区見学報告

Ⅱ．今回の遠征の意義、自由行動導入の意図

Ⅲ．遠征事前活動・準備について

１．田村耕太郎氏講演会報告
２．山田章氏講演会報告
３．事前勉強会報告
４．ＯＢの方々との事前ミーティング報告
５．危機管理セミナー報告

Ⅳ．今後の展望

Ⅴ．参加者感想文

Ⅵ．参考資料

１．収支報告書
２．参加者一覧
３．遠征計画書
４．NUS への Introduction Sheet
５．NUS との交流討論会プレゼンテーション資料

～はじめに～

私たち一橋大学体育会バレーボール部は、如水会、および OB の皆さまのお力をお借りして、2014 年 8 月 3 日から 8 月 9 日までシンガポールにあるシンガポール国立大学（以下、ＮＵＳ）と交流試合をして参りました。バレーボール部にとって今回の海外遠征は 3 度目の試みでしたが、無事成功することができました。
頂きましたご支援・ご助力に対し御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。
今回の海外遠征につき以下の通りご報告申し上げます。

Ⅰ．遠征内容

1.　日程

2012 年 8 月 3 日(日) 17：00　羽田空港からシンガポールへ出発(SQ633 便)
8 月 9 日(土) 06：55　シンガポールから羽田空港に到着(SQ636 便)

2.　参加者

体育会バレーボール部

現役部員	四年　5 名
	三年　9 名
	二年　6 名
	一年　8 名
	付添 OB　2 名
	計　30 名

氏名一覧は添付の参考資料ご参照。

（補足）現地で所用滞在していた石川城太部長は、交流試合と討論会に参加。

3. 交流先

シンガポール国立大学（以下、ＮＵＳ）Volleyball Varsity Team

4. 交流試合会場

U-town 内 Stephen Riady Centre

5. 宿泊場所

LINK HOTEL

(50 Tiong Bahru Rd, Singapore 168733, Singapore)

6.　日程

一橋大学 体育会 バレーボール部 第3回海外遠征(シンガポール)日程表

日時	年月日(曜)		予定	便名・移動手段
第1日(集合/出発)	2014/8/3(日)	14:45	羽田集合	
		17:05	羽田出発	by SQ633
(到着)		23:05	SPR到着	
			LINK HOTELへチェックイン	by 手配Bus
第2日	2014/8/4(月)	AM/PM	市内見学	by 手配Bus
		17:00	三井物産シンガポール着、如水会シンガポール支部との面談	
		夕食	飲茶レストラン	
第3日	2014/8/5(火)	AM/PM	リトルインディアなど散策	by MRT・徒歩
		16:00～19:00	NUSキャンパス視察	
		19:00～23:00	NUSバレー部との親善試合(Uタウン体育館)	
第4日	2014/8/6(水)	11:00～12:30	日本大使館(JCC)訪問	by 公共Bus・徒歩
		17:00～18:00	NUSとの交流討論会	
		18:00～19:30	NUSとの懇親夕食会	
第5日	2014/8/7(木)	AM/PM	班別自由行動	
		16:00～18:30	Yale NUS Collegeとの交流会	
第6日	2014/8/8(金)	AM	マリーナ・ベイ地区見学	
		PM	自由行動	
(帰国)		22:30	SPR出発・帰国	by SQ636
第7日(到着・解散)	2014/8/9(土)	6:30	羽田着・空港にて解散	

7.　日程詳細

8/3（日）　一日目

バレー部にとって３回目の海外遠征の一日目。
日本時間 14:45 に羽田空港国際線ターミナルに集合。
シンガポール航空 633 便に搭乗し、およそ 6 時間かけてシンガポールへと移動した。
現地時間 22:00 過ぎにチャンギ国際空港に到着。そこからバスに乗って宿舎へと移動した。一日目は移動のみで終了。

8/4（月）二日目

二日目は観光バスを利用し市内見学した。最初に有名観光スポットのマーライオンパークに到着。シンガポールは日本の夏と同等の暑さで、この日も屋外の行動は非常に汗ばむ陽気であった。また、マーライオンパークの目の前にはマリーナベイサンンズと呼ばれる巨大なホテルが建てられており、シンガポールの近年の発展ぶりがうかがえた。その後、昼食を取って、アラブストリート・植物園（ボタニックガーデン）を散策した。観光立国なだけあって、至る所に観光スポットが観られ、観光客も非常に多く非常に活気があった。
大体 16:00 頃までで市内観光を終了。夕方はスーツに着替えて三井物産シンガポールを訪問した。三井物産にて、如水会シンガポール支部の一橋のＯＢの方々にお会いし、シンガポール・ミャンマーの現状についての説明を受けた。シンガポールやミャンマーの事情に加え、質疑応答の場面ではＯＢの方々独自の経験もお聞きすることが出来、世界で幅広く活躍する方々の話を聞く機会が得られて非常に有意義であった。その後はＯＢ

の方々も交えてチャイナタウンにて夕食会が開かれた。

8/5（火）　三日目

三日目の午前はインド人街、通称リトルインディア内を各班に分かれて散策した。ヒンドゥー教寺院や怪しげな土産物店など、独特な建物や店が立ち並ぶエキゾチックな街の雰囲気は、高層ビルが立ち並ぶ海岸地区のそれとは大きく異なり、非常に面白かった。そして、昼には「ホーカーセンター」と呼ばれる、シンガポール各所にみられる屋台街の一つを訪れ、ナシゴレンやチキンライスなどの、現地の料理を楽しんだ。基本的においしい食事が手軽に食べられるのが、ホーカーセンターの魅力である。14:00 に班別行動を切り上げた後、地下鉄を使って NUS へ移動し、NUS バレー部の方々と合流した。それから 2 時間ほど、NUS バレー部の方々の先導で、キャンパスツアーをさせていただいた。NUS のキャンパスはとても広く、学内を走るシャトルバスを使いながら、巨大な講義棟、寮、図書館が連立する広大なキャンパス内を散策した。普段一橋という小規模な大学に通っているからか、なおのこと広く感じられた。いかにシンガポールが教育に多くの資金をつぎ込んでいるのかが、視覚的に理解できる。

ツアー終了後、キャンパス内にあるきれいな学食で軽めの夕食を取ったあと、今回の遠征のメインである NUS バレー部との親善試合を行った。NUS の選手たちは頭脳だけではなくバレーボールの技術も優れており、我々は 1 セットをもぎ取るのが精一杯であった。当初、19：00 から 22：00 までの 3 時間で予定していた親善試合だが、非常に

盛り上がったため、23 : 00 過ぎまで試合をさせていただいた。NUS の部員の方々は皆好意的で、試合の後にはＴシャツ交換が行われるなど、楽しい雰囲気につつまれた親善試合であった。

8/6（水）四日目

四日目、午前は日本大使館の竹内大使に面談した。この日は大使館の付属施設である JCC(Japan Creative Centre)において、大使自らによるシンガポールについての解説や、JCC の行っている活動についての説明を拝聴した。竹内大使は一橋の OB ということもあり、我々を温かく受け入れてくれた。その後は班別の自由行動、この日はオーチャード・ロード周辺地域を散策。ここは敷居の高い店が立ち並ぶ街で、日本でいうところの銀座に近かった。適当にウィンドウショッピングを終えた後は、デパートの地下のフードコートで昼食を取った。ホーカーセンターと同じく、フードコートも手軽な食事処としてシンガポール各所に存在する。

午後は前日に引き続き NUS へと移動し、NUS バレー部との討論会を行った。討論のテーマは「日本の大学教育の歴史と現状、および教育の機会均等の是非」。まずはこちらがテーマについてのプレゼンを 30 分ほど行った後、少人数のグループに分かれて NUS の方々と意見を交わした。シンガポールは教育制度が日本と大きく異なることを説明してもらい、日本の状況を相対化してとらえる、いいきっかけになった。
討論会の後は引き続き懇親会へと移り、一緒に夕食を取りながら 2 時間ほど歓談した。普段接することのない、エリート学生との英語での交流は、とても刺激的でかつ非常に頭を使い、時間はあっという間に過ぎていった。

8/7 （木）五日目

この日は事前準備・計画をしっかり行ったうえで、6 人ほどの班に分かれ昼過ぎまで自由行動した。班別にそれぞれ目的地を設定し、自由に動き回った。ほとんどの班は、一大観光地であるセントーサ島を訪れて、ビーチにてビーチバレーや海水浴を楽しんだり、シー・アクアリウムと呼ばれる巨大水族館を訪れたりしていた。途中スコールに 2・3 回見舞われるなど悪天候による影響を受けたが、各班予定していた自由行動を無事に終えた。午後は、直前に実施が決まった Yale-NUS College への訪問を行った。まずは昨年できたばかりのキャンパス内を案内していただいた。キャンパスというにはまだまだ建設途中の部分がほとんどで、今は学生と教授が生活する寮と、講義棟が合体したビル

のような建物で授業が行われているようだ。すべての学生は寮に入り、共同生活を送っており、皆明るくいい雰囲気であった。その後、Yale-NUS の新二年生の方々と懇親会をした。Yale-NUS には非常に日本に関心がある学生が多く、懇親会は和気藹々とした和やかな雰囲気で行われた。現地のエリート学生と交流できる非常に貴重な機会であった。

8/8（金）　六日目

この日は遠征最終日であり、最後の市内見学を行った。午前はシンガポールフライヤーという大観覧車に乗った。上空からは、湾港施設やジュロン島が一望できた。また、マレーシアも見ることができ隣国との近さを実感することができた。午後はトライショーと呼ばれる、二人乗りの台を自転車で引っ張る人力車のような乗り物に乗って、チャイナ・タウン～リトルインディア～アラブストリートを散策した。その後、マリーナ地区で 5 時間ほど自由行動の時間を取り、各々シンガポール最終日を楽しんだ。そして 19：00 に再集合し、チャンギ国際空港へ移動、22：30 発のシンガポール航空 636 便で羽田へと向かった。

8/9（土）　七日目

飛行機に乗ること 6 時間、6:00 過ぎに羽田空港へと戻ってきた。特に問題や事故もな

く参加者全員が帰国した。一週間にわたる非常に有意義な遠征が、無事に終了した。

８．　市内見学報告

文責　４年　池川　悠

【日時】2014 年 8 月 4 日（月）

【場所】シンガポール市内

【概要】及び【感想】

この報告書では 2 日目午前から午後にかけて、現地のツアーガイド引率の市内見学について記載します。具体的には（1）マーライオンの見学（2）アラブストリート（3）ボタニックガーデンを取り上げて報告とします。

(1)　マーライオンの見学

これはマリーナ・ベイ・サンズと海を隔てて向かいにあります。
シンガポールといえばこれを第一に考える日本人も多く、その証拠に
現地で多くの日本人から写真撮影を依頼されました。その一方、
周囲には英語、中国語・・・など多くの外国人もいて、この像が
シンガポールの象徴的な位置づけであることを実際に感じることができました。

(2)　アラブストリート

ここは大きなモスクを中心にしたアラブ人街の一角です。残念ながらモスクの中には入ることはできませんでした。しかし、ここには自分の好きな香水を作れるお店があります。僕は物見遊山的な気分でこのお店に入りましたが、この店のオーナーは日本語、中国語、英語、アラビア語を自由に使いこなせる方でした。僕らと一緒に中国人とカナダ人がお客さんでいましたがどれも自由に使いこなしている姿は非常に刺激的でした。前回の中国製でも感じましたが「言葉は武器」であることを再認識し、今後語学にもっと力を入れていかなければという気持ちを強く持つことができ、このような「一流」の商売人と接することができたことは非常に刺激的でした。

(3)　植物園

ここには名の通り多くの植物が管理されていました。個人的な感想として、この植物園の中には日本で見るような植物もたくさんありそこは意外でした。もちろん日本では見られないような植物もたくさん見ることができました。ここではたまたま現地の小学生と居合わせ、現地の人にとっても学びの場となっているということもわかりました。この植物園である植物について深く学んだということよりも、外国人観光客が多くいることが非常に印象的でした。

この市内見学を通して①語学能力の重要性②外国人観光客の多さの二点を痛感しました。①は当たり前ですが、②はそこからシンガポールという国が 1 つ明確な観光立国という目標に向けた努力やその結果が垣間見えたことが何より勉強になりました。これは体育会として勝利を目指す過程、また就職後において組織をどう動かすのかという点に向けて非常に学ぶ点が多く有意義なものでした。

９．　如水会シンガポール支部（三井物産シンガポール）表敬訪問報告

文責　2 年　大野沙織

【日時】2014 年 8 月 4 日（月）【場所】三井物産シンガポール、飲茶レストラン

【概要】

三井物産シンガポールに勤務されている 6 名の一橋大学卒業生の方々からお話を伺った。最初に双方自己紹介の後、支部長の三井物産シンガポール・山内社長から「歓迎のお言葉」と「シンガポール事情説明」を頂き、次いで丸山さんから「シンガポールの開発戦略」と「ミャンマーの最新事情」について説明を頂いた。シンガポールは経済面でのインセンティブを積極的に出して、世界中から企業を呼び込んでいることや、建国後 49 年しか経っていないのにも関わらず、一人あたりの GDP が日本を超えていることなどを学んだ。また、ミャンマーは最貧国である反面、資源が豊富な国であることを教えて頂いた。お話の最後に、質問の時間を設けて頂き、3 年生 5 人の質問一つ一つに対して 6 人それぞれの方から丁寧にお答え頂いた。

表敬訪問の後、ＯＢの畑さんと丸山さんと共に、チャイナタウンの飲茶レストランで夕食を取った。ここでは、商社での仕事内容や普段の生活についてなど、海外勤務が今後あり得る 4 年生にとっても、就職活動を控えた 3 年生以下にとっても、非常に参考になるお話をお聞きすることができた。

【感想】

海外駐在中の方のお話を聞く機会はめったに無いので、非常に貴重なお話を伺うことができた。また、海外で働いている女性の方から直接話をお伺いできたことは、女子マネージャーにとって特に勉強になった。女性の少ない商社で働いて感じることや、実際何時ぐらいに帰宅できているか、海外駐在のメリット・デメリットなどをお聞きすることが出来、これから就職活動をしていく上でも、大変勉強になった。

シンガポールに来て一か月経った現在も部屋の片づけが終わっていないというお話からお仕事の忙しさが垣間見えた。

１０．　リトルインディア見学報告

文責　１年　松浦弘明

【日時】2014 年 8 月 5 日（火）10:00～14:00

【場所】リトルインディア

【概要】

ホテルを出発して、徒歩で最寄り駅であるアウトラム・パーク駅（Outram Park MRT Station）に向かった。そこから North East Line(NE)に乗り、4 つ先のリトルインディア駅（Little India MRT Station）で下車した。

リトルインディア駅からは班行動となった。私の所属する和田班は、まず始めにリトルインディア駅の一つ先のファーラー・パーク駅近くのスリ・スリニヴァサ・ペルマル寺院(Sri Srinivasa Perumal Temple)を見学した。この寺院はヒンドゥー教寺院でヒンドゥー教の 3 最高神の 1 人、ヴィシュヌを祀ったものだ。重要記念建築物に指定されている。寺院の中は広々としていて荘厳な雰囲気だった。(下の写真 a)

次に向かったのは仏教寺院であるシャカムニ・ブッダガヤ寺院(千燈寺院)。この寺院には、高さ 15 メートル、重さ 300 トンもある色鮮やかな大きな大仏が鎮座している。そしてこの大仏の周りには 1080 個の法燈が巡らされていた。この寺院は 1927 年にタイからやってきた僧侶によって創建され、タイ仏教と中国仏教が融合した寺院と言われている。この大仏の裏手には寝釈迦仏があった。(下の写真 b)

最後に、セラングーン・ロードに面して立つスリ・ヴィラマカリアマン寺院(Sri Veeramakaliamman Temple)を訪れた。この寺院はリトルインディアの中でもとくに有名なヒンドゥー教寺院で、「女神カーリー」を祀ったものだ。多くの観光客もいた。私たちが訪れた時、幸運にも「プジャ」と言われる祈りの儀式を見ることができた。上半身裸の僧侶たちが銅鑼を鳴らしながら祈りを捧げ、信者たちが花や果物などの供物を神々に奉っていて、とても神秘的であった。(下の写真 c)

寺院見学が一通り終わった後、リトルインディアにあるファミリーレストランで、カレーとナンを食べ、リトルインディア観光は終了した。

a.

b.

c.

１１．　NUS キャンパスツアー報告

文責　３年　長尾悠平

【日時】2014 年 8 月 5 日（火）14:00~16:00【場所】NUS キャンパス

【概要】

同日午前中のリトルインディア見学後、午後から NUS を訪問。NUS のバレー部学生の方々に２時間に渡りキャンパスツアーの案内をしていただいた。

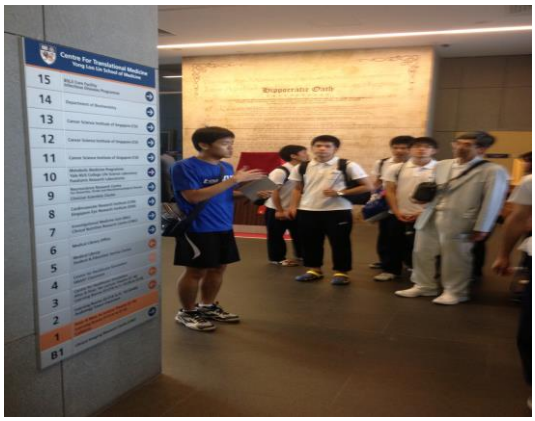
NUS は 1905 年に設立された世界有数の総合大学である。世界中から留学生を受け入れていることや、総合大学であることからキャンパスの数や規模そのものが大きく、Kent Ridge, Bukit Timah, Outram の３つのキャンパスがある。此度はそのうち試合、懇親会ともにこちらが会場になる Kent Ridge のキャンパスを案内された。大学付属病院、各学部校舎や競技場はじめ、室内運動施設やタウングリーン、生協学食など。

大学の敷地内があまりに大きいことから、シャトルバスが２３時過ぎまで敷地内を走っている。

【感想】

キャンパスツアーの引率は NUS バレー部で３年日本語を学んだ学生であった。扱う日本語は会話や説明をするのに十分であった。そのバックグラウンドには一週間に７時間日本語の授業があることがあるようだ。

それぞれの建造物は付属病院であったり、学部専門の建物であったりと１つ１つは当たり前のものが並ぶが巨大である。一橋大では見慣れない光景で世界に名を馳せる所以が垣間見えた。また、販売店では学食のほか NUS の生協やアディダスをはじめとした一般企業が続々進出しており、一種のデパ地下を再現しているようにも見える。また、グリーンタウンは敷地内の中庭であり、それを建物が囲むようにして中庭を一望でき、一同眺める壮観に声をもらした。観光ではもちろん自力で旅行にでかけても、学生から生の声を聞き、学内を回ることができるかどうかは断言しがたく、貴重な機会を頂けたことは光栄である。



１２．　ＮＵＳバレーボールクラブとの交流試合報告

文責　１年　竹内誠也

【日程】2014 年 8 月 5 日（火）19:00～23:00

【場所】NUS U-Town 内 Stephen Riady Centre

【概要】

19 時頃から両チームでウォーミングアップをはじめ、19 時 40 分頃から試合を始めた。1 セット目、私たち一橋バレー部はフルレギュラーメンバーで挑むも 20－25 で敗北。その後もメンバーを変えつつ NUS バレー部に挑んだがサーブで上手く流れが作れず 2 セット目は 21－25、3 セット目も 16－25 で連敗してしまった。そんな中迎えた 4 セット目、サーブを基調に攻守が絡みなんとか 25－18 でセットを取ることができた。その後も 5 セット目、6 セット目を行ったが 21－25、17－25 でどちらも敗北してしまった。予定では、このセットで親善試合は終わる予定であったが一橋側の選手が「one more !」ともう１セット頼むと NUS 側も気前よく快諾し、急きょ 7 セット目を行うことに、一進一退の試合展開であったがまたしても一橋は 21－25 で敗北してしまった。親善試合は終わったように思われたが、またしても一橋側の選手が「泣きの」8 セット目を提案。NUS 側はまたしても快諾し、最終 15 点マッチを行った。試合はサーブが好調であった一橋バレー部が勝利したが、今度は NUS 側から 25 点マッチに延長するよう提案があり、延長戦を行うことに。

試合はデュースにもつれ込んだが最後は NUS バレー部が意地を見せ、26－28 で一橋は敗北した。ここで終バスの関係もあり親善試合は終了、両チームで集合写真を撮った。その後、一部の生徒は NUS とのユニフォーム交換などして友好を深め、親善試合はとても有意義なものとなった。

【感想】

知力でシンガポール No.1 の NUS は戦う前の予想では一橋に体力で劣るのではと思われていたが、実際やってみると NUS バレー部は体格でも、技術でも一橋を凌駕していた。翌日開かれた懇親会で聞くと 8 歳の頃からバレーを始めたという選手などスポーツにおいても優秀な選手たちであった。そんな選手たちとの親善試合は私たち一橋バレー部にとって大変大きな刺激となり、今後の指針ともなった。また、国の違いを乗り越えて両チームの皆を笑顔にすることができるバレーボールという競技のすばらしさを改めて感じた。

１３．　日本大使館・竹内大使との面談報告

文責　2 年　粟野一輝

【日時】2014 年 8 月 6 日（水）11:00～12:30

【場所】JAPAN CREATIVE CENTRE

【概要】

オーチャード・ロード西端から少し入ったところにある、日本大使館の付属施設である JAPAN CREATIVE CENTRE を 8 月 6 日の午前中に訪問した。この建物は日本の文化を発信するために、第一次安倍内閣時代に建築が認可され、鳩山内閣時代に完成したという。このセンター内で、在シンガポール日本大使の竹内大使に面談した。大使は偶然にも一橋大学を卒業しており、先輩にあたる人であった。そんな大使から、貴重なお話を幾つも聞かせて頂いた。シンガポールに高層ビルが次々と建設されているのは、単に経済発展がめざましいだけでなく、国土の 7 割程が国有地であるという事情もあるという。また、9 日に建国 49 周年を迎えるシンガポールは、建国に関わった人たちが次々と引退しており、今の若者へ交代していく時代にシフトしている。そんな若者たちは、先駆者たちよりハングリー精神がなく、これからのシンガポールの成長は止まってしまうのではないかと大使は危惧していた。そして、政治の中心となるであろう NUS の学生たちにこのことを問いかけてみてはどうだろうかと大使に提案して頂いた。

また、JAPAN CREATIVE CENTRE の館長である伊藤さんにセンターの概要を解説して頂いた。マンガ・アニメだけでなく、ファッションや建築分野においても、日本文化をシンガポールに紹介しているということが分かった。京都大学などの大学の建築学科の学生とシンガポールの学生が交流したり、ファッションショーでは和服をアレンジした衣装を身にまとったシンガポールのモデルが歩いたりと、親日国家ならではの盛り上がりを見せたイベントの写真や動画を見せて頂いた。日本文化がシンガポールで定着していることが実感でき、またそれらの成果は JAPAN CREATIVE CRNTRE の努力の賜物であることが分かり、この訪問は大変意義のあるものであった。

１４．　ＮＵＳバレー部員との交流討論会報告

文責　4 年　小崎浩平

【日時】2014 年 8 月 6 日（水）17:00~18:00
【場所】ＮＵＳキャンパス内　Conference Room
【概要】
遠征４日目、NUS バレー部員との交流討論会が行われた。NUS 側からは学生６名とスポーツマネージャーの方の合計 7 名、一橋側からは学生 28 名に副代表幹事の宗田さん・仁井さん、部長の石川先生の OB3 名を加えた 31 名が参加した。討論会はまず、我々からの「日本の大学について」のプレセンテーションで始まった。その内容は、本学の歴史を紹介するところから始まり、就活と大学、教育格差についてなど多岐にわたった。その後、五つのグループに分かれてそれぞれのグループに NUS の学生に加わってもらい、以下の二つのテーマで討論会を行った。まず一つ目のテーマとして「大学に行く目的」について意見交換を行った。様々な経歴を持って NUS に入ってきた学生が多く、日本の学生よりも高い目的意識を持っているのが印象的だった。次に「教育格差を是正すべきかどうか」という論点で討論を行った。中にはシンガポールの教育制度そのものを一から説明してくれる学生もおり、シンガポールの競争の激しさや、年少時から競争にさらされることなど、日本とシンガポールの教育制度の違いを知ることができた。討論会自体は 1 時間という時間制約があったが、どのグループも時間が足りなかったようで、レセプションが始まっても議論が尽きることはなく、とても内容の濃い時間を過ごすことができた。

【感想】
当初はプレゼンテーションの内容が伝わるか、討論が成り立つかなど不安な要素が多かった。しかし、NUS の学生が聞き取りやすい英語でフレンドリーに話してくれたこともあり、討論会を円滑なものにすることができた。NUS の学生も日本について関心を持っている学生が多く、単なる一方的な発表の場ではなく、意見”交換”会とすることができた。討論会は、今回の遠征において試合に次ぐメインイベントであったが、試合以上に有意義な時間になったのではないかと思う。

１５．　NUS バレー部員との懇親夕食会報告

文責　4 年　槌尾啓

【日時】2014 年 8 月 6 日（水）18:00～20:30

【場所】ＮＵＳキャンパス内　Conference Room

【概要】

討論会を終えると、会場の扉の外にはすでに食事が用意されていた。炒飯、焼きそば、揚げ物といった現地の食べ物が並び、それぞれお皿に盛ってまた部屋に戻って食べるというシンプルなスタイルで懇親夕食会は行われた。食事はその前のグループワークの班でそのまま席を作り、話の続きをする班もあればまた違った話題に移る班もあったようだ。それぞれの食文化や幼少期の過ごし方についてまで話題は広がりを見せ、特に日本の漫画やアニメ、ゲームといったカルチャーについては思い出を共有できる部分もあり、お互いに親近感を覚えるきっかけとなったようだ。討論会の雰囲気そのままに和やかなムードで包まれたまま時間は矢のように過ぎていき、あっという間に別れの時間を迎えることとなった。最後は宗田先輩のスピーチによってお互いの友好関係をこれからも深めていこうという約束をし、日本からのお土産を手渡して感謝の気持ちを伝え、会を終える運びとなった。

【感想】

今回の夕食懇親会では、終始和やかな雰囲気で、NUS の学生の日本に対する興味・関心の高さや私たちに対するホスピタリティを強く感じることができた。私たちのつたない英語にも熱心に耳を傾けてくれ、こちらが聞き取れない場合は何度でも伝えなおしてくれるその優しさには本当に助けられた。そのおかげでどの部員も英語でのコミュニケーションの難しさや、異文化交流の一端に触れ、今後の勉強の励みになることは間違いないだろう。私自身、自分の英語力の無さ・英語でのスピーチの難しさを肌で感じ、次の機会にはもっとうまくという思いをより強く抱くことができた。社会人になる前にこうした体験をすることができて、本当にありがたい経験になったと感じている。

１６．　班別自由行動報告　その１

文責　１年　裏田舜介

【日時】2014 年 8 月 7 日（木）9：00~14：00

【概要】

この日は自由行動ということで相原班、太田班、粟野班、岡田班、和田班と五つの班に分かれてホテルを出発するところから完全に別行動となり、我々はセントーサ島の見学を行った。

セントーサ島はシンガポールの南に位置する島で、ユニバーサル・スタジオ・シンガポールや大型カジノ施設などがあり島全体が観光地といっても過言ではないほどの統合型リゾートとなっている。ほかの班では高さ 75m に吊るされた 450m もの長さのワイヤーで島内を駆け抜けるメガジップを体験した所もあったようだが、自分たちの班はシー･アクアリウムという水族館を見て回った後にシロソビーチで海水浴や現地の人たちとのビーチバレーなどを楽しんだ。水族館は日本のようにペンギンやシロクマなどはいなかったが規模は大きく、特に世界一の大きさを誇る巨大水槽は魚の群れやサメが何匹もいて迫力があった。入場料は大人 29Ｓドル、子供 20Ｓドルであるが、足元がガラス張りの水槽の所や海洋生物と触れ合えるコーナーなど飽きさせない工夫が施されており、訪れる価値は十分あると思われる。

水族館を見終わったあとにはシロソビーチに足を運んだ。ここは本当にきれいなビーチでごみなどもまったく落ちていなかった。また、浜辺でビーチバレーをしていた人がいたので一緒に参加させてもらった。

話を聞くと彼女らはシンガポール人の 20 代の学生で休みの日に友達とここに遊びにきたようである。ビーチバレーをしている最中にスコールが降ってきたが 15 分ぐらいですぐに止み、その後は太陽がでて、とても暖かくよい天気だった。

【感想】

自分たちがセントーサ島を訪れたのは平日の午前中であったため、そこまで混雑しているわけでもなく快適に過ごすことができた。また、最大の観光地であることもあり、現地の小学生が遠足で来ており、ほかの日本人もシンガポール本島よりもたくさんいたように感じた。島内の交通機関であるセントーサ・バスやセントーサ・エクスプレスは入島料を除けばすべて無料で利用しやすかったが、飲み物が 4 S ドル以上するなど物価は高かった。はじめはシンガポール人と英語で会話できるか不安だったが、バレーボールというスポーツを通じてすぐに仲良くなることができた。半日では回りきれなかったため、また時間があるときに訪れたいなと思えるほど楽しむことができた。

１６．　班別自由行動報告　その２

文責　１年　山浦　拓

【日時】2014 年 8 月 7 日（木）8:00～15:00

【概要】

自由行動は５つの班に分かれて行われたが、すべての班がシンガポール最大の観光地であるセントーサ島を訪れた。セントーサ島までの行き方はモノレールであるセントーサ・エクスプレスやケーブルカーなど様々である。セントーサ島での行動は班ごとに異なるが概ねビーチと水族館には訪れているようである。

自分は太田班のメンバーであったため、以下は太田班の行動を大枠に詳説してゆく。

今回訪れたのはパラワン・ビーチ、メガシップ・アドベンチャーパーク、シー・アクアリウムの三つである。

- パラワン・ビーチ
  セントーサ島に広がる自然とビーチが調和した場所であり、吊り橋を渡り、アジア大陸最南端の島にゆくことができた。その島からは近接する工業地帯を臨むことができた。
- メガシップ・アドベンチャーパーク
  命綱をつけて島の中心部の山から海岸に隣接する小島までワイヤー一本で下ってゆくアトラクション。時速 50 ㎞で１分間島の景観やビーチの様子などを見ることができた。

- シー・アクアリウム
  世界最大の水槽を持つ水族館でありながら、入り口のエリアはシンガポールなどの港市国家や中国、インドの港の様式や発展の歴史などを伝えるものであり、知的好奇心を刺激された。

【感想】

今回、竹内大使に「なぜ観光立国として発展してゆくシンガポールには奇抜で創造的な建築が他国（特に日本）よりも多いのか」について質問する機会があり、竹内大使は地震の少なさ、国有地の多さ、小国としての危機意識などを理由として挙げられていたが、セントーサ島も例外なく島全体がこの理由に基づいて作られた奇抜で、そして巨大な建築物であるように見受けられた。また、モンスターの形をしたゴミ箱など、ゴミ箱のように細部においてもユーモアを忘れない観光大国の精神を見出すことができた。日本が今後シンガポールのように観光業に力を入れていくにあたり、シンガポールに見習う点は少なくないと痛感した。

１７．　Yale-NUS College の学生との交流報告

文責　１年 宮口佑太

【日時】2014 年 8 月 7 日（木）16:00～18:30

【場所】Yale-NUS College　キャンパス

【概要】

各班の自由行動ののち、地下鉄やバスを利用して Yale-NUS College へと向かった。Yale-NUS College は、300 年の歴史を誇るイェール大学が初めて海外に設立した新大学である。Yale-NUS はイェール大学と NUS が共同で設立する大学という位置づけとなっている。今回は、この大学の１期生である２年生の方々との交流が行われた。

まず４班ほどに分かれて、Yale-NUS のキャンパスを案内してもらった。ビルのようなキャンパスは、ある階までが講義に使われ、それより上の階は学生の居住スペースとなっていた。移動の際、学生たちはすれ違うたびに笑顔で言葉を交わしており、学生間の親しさが感じられた。他にも教授も利用するという広い食堂や、学生が集まる多目的ルームなどの案内を受けた。

そして我々一橋大学と Yale-NUS の学生が一堂に会し、互いの交流が行われた。様々な国からの学生がおり、中には日本人や日本語が堪能な人もいた。慣れない英語での会話に苦労しながらも、自己紹介や日本文化の紹介などをした。中には他愛もない話で盛り上がっているグループもあった。

最後に４年生の池川先輩が一橋大学の歴史を紹介し、最後のメッセージを伝えあって、集合写真を撮ったのちに終了した。

【感想】

先日の NUS との討論会に続き、他大学との交流ということで、部員一同楽しみにしていたように思う。交流が始まってからは初めこそ緊張が見られたものの、Yale-NUS の学生のフレンドリーさに触れ、緊張もなくなり積極的に質問もできた。歓談の際には、私はシンガポールの言語教育について、一橋大学の紹介、なぜ商学部を選択したのか、日本の漫画やゲームについてなど色んなトピックについて話をした。中には私の出身である広島を訪れたことがある、という学生もおり、時期的に近いということもあったので８月６日のことについても話をした。いずれのトピックについても学生たちは真剣に話を聞いてくれて大変嬉しかった。

自分の話す英語が通じる嬉しさはもちろん、国際交流を行っている実感など、グローバル人材を志す我々にとって大変よい収穫があったと思う。個人的にも、PACE の授業を通じて培ったスピーキングのスキルを試す機会を楽しめたし、いい刺激を受けた。入学当初に比べると色んなことがスムーズに話せるようになったと思うし、一方でまだまだ表現に苦しむこともあった。自分も含め、部員一同の今後の英語に対する意欲が相当高まっており、有意義な交流が行われたと感じている。

この交流を通じて築くことのできた関係は末長く続けていきたい。またこのような関係を築くにあたって、多額の支援をくださった如水会の皆様、バレーボール部 OB の皆様、その他すべての関係者各位への感謝を忘れず今後の学生生活に活かしていきたい。

１８．　ナイトサファリ見学報告（有志自由参加）

文責　3 年　中澤曜子

【日時】2014 年 8 月 7 日（木）20:00～

【場所】ナイトサファリ

【概要】

YaleNUS の学生と交流した後、有志を募りいくつかのグループに分かれた上で公共交通機関を使用し、ナイトサファリへ出かけた。この施設は夜間のみ開園している世界初の動物園であり、およそ 2,500 頭の夜行性動物が生息している。シンガポールの人気観光地のひとつである。

このナイトサファリはトラムと呼ばれる大型バスに乗りこみ、クルーの案内を聞きながら、道端に登場する動物たちを観察できるものである。トラムは日本人向けに日本語のクルーが案内をしてくれるものもあった。乗車時間は約 40 分で、東南アジア，アフリカのジャングル地帯など様々な場所に生息する動物の自然な姿を見ることが出来た。また、トレッキングトレール（徒歩コース）もあり、通常のトラムでは見られない徒歩コースならではの動物も間近で観察した。

園内ではその他にもアニマルショーや火吹きのダンスパフォーマンスが繰り広げられており、非常に充実した施設であった。

【感想】　シンガポールを代表する観光施設のひとつであるこのナイトサファリに遠征前から行きたかった私にとっては、このような時間を作っていただくことができ大変うれしかった。日本の動物園で昼間に見たことのある動物の姿とは違い、ライオン，クマなど夜行性の動物が活発に動いている様子を間近で見られたのは大変良い経験であり、自然を感じた。　観光施設の面では、タクシー，バスなどの交通機関が整っており、トラムも英語以外の言語で案内するサービスが充実している。また、トラムの他にもエンターテイメントあふれるショー、ローカルフードやドリンク、デザートまで様々なレストランが施設内に併設されている。観光産業がシンガポールを支えていると一般に言われているが、このように観光施設の充実も大変なものであり、まさに国を挙げての観光への情熱を感じた。

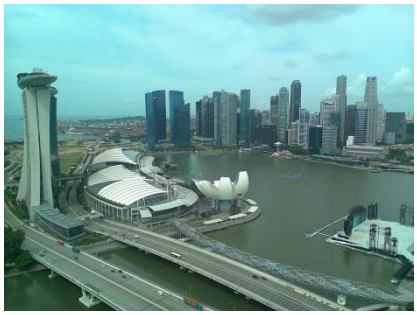
１９．　マリーナ地区見学報告

文責　3 年　駒将平

【日時】2014 年 8 月 8 日（金）10:00～19:00

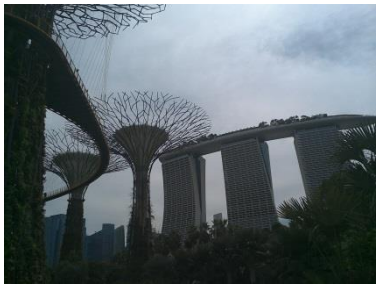
【内容】

アジア最大の観覧車であるシンガポールフライヤー、近未来的植物園のガーデンズ・バイ・ザ・ベイ、独特な外観で日本でも有名なリゾートホテルのマリーナ・ベイ・サンズを中心にマリーナ地区一帯の見学を行った。



シンガポールフライヤーでは 28 人乗りのゴンドラを 28 分で一周した。（シンガポールでは 28 は縁起が良い数字だと言われている。）頂上では横にそびえるマリーナ・ベイ・サンズとほぼ同じ高さまで到達し、マリーナ地区を一望することができた。また海側には膨大な数のコンテナや船舶が見られ、アジアの港として発展を遂げてきたシンガポールという一面も感じられた。

その後各自自由行動となり、マリーナ地区一帯の見学となった。ほとんどの部員はガーデンズ・バイ・ザ・ベイかマリーナ・ベイ・サンズ内を散策した。ガーデンズ・バイ・ザ・ベイはスーパーツリーを中心とした巨大な植物園となっている。中でもスカイウォークと言われるツリーから吊るされたスロープが名物である。足元は金網状になっており下を見れば足がすくみ、大人数で移動すると若干揺れてさらに足がすくむ仕組みとなっていた。



マリーナ・ベイ・サンズには超高層プールや大型ショッピングモールなどがあり、大型商業施設としてシンガポールの観光産業に大きく寄与しているということが肌で感じられた。また 21 歳以上の部員の中にはカジノへも足を運び、シンガポールにお金を投資してきた者もいた。

【感想】

国としても非常に注力している観光産業の中でも、特にマリーナ地区はシンガポールの力が結集しているように思えた。またカジノでは実際に歩いてみると秒単位でありえない額が移動していることを実感した。日本でも現在カジノ法に関しての議論が行われているが、取り入れるだけの価値はありながらもより慎重に議論をしていかなければならないと感じた。

Ⅱ．今回の遠征の意義・自由行動導入の意図

文責　３年　相原健吾

今回遠征の意義

１）急速な経済発展によって近年、先進国の仲間入りを果たしたシンガポールを実際に訪れることで、日本国内に留まっていては知ることが出来ない異国の歴史・文化に触れることで知見を広げ、将来に役立つ財産を得られる機会とする。
２）及びこれまでの２回の海外遠征に引き続き、他国の学生と、学生同士という立場で海外と交流することで同世代が持つ国際感覚を養うとともに、バレーボールを通じて交流を深めることで一橋大学バレーボール部としての活動の充実を図る。
３）部として海外に渡航することで、個人の観光旅行では訪問出来ないような施設である日本大使館や日系企業への訪問を行い、日本や海外についてのお話を伺う機会とする。
４）また、今回遠征においては過去二回のオーストラリア遠征、中国遠征の反省を踏まえ、学生がより自主的に海外にて行動する、という目標を掲げ、班別自由行動の導入を行なったり、チャーターバスによる移動を減らし、現地公共交通機関の利用にも多くチャレンジしたりすることで、受動的ではなく部員が能動的に行動できるような遠征とすることを目指す。
　以上、４点を意義として掲げ、実行を行なった。

自由行動導入の意図、意義

　二年前に実施された中国遠征の反省において、遠征企画担当者がガイドのように部員を先導し、ツアー旅行のようになってしまっていたという反省があがっていたため、今回のシンガポール遠征ではシンガポールの交通網の利便性や治安の良さを活かし、個人が見学したい施設や視察したい町並みを事前に調査し、能動的に海外で活動を行なえるよう、実際に公共交通などを用いて行動する時間の導入を行なった。
　とは言っても、個人で行動するのはリスクが大きいとともに、運営を担当する海外遠征企画担当チームも全員の行動を把握することは困難であることから、海外遠征企画担当チームメンバーを班長とする班を５つ作成し、部員をそれぞれ学年や男女のバランスも踏まえて分けて、５日目の 8/7 の午前中に班別行動を行なわせ、大体の班ごとの行き先などは遠征企画担当チームの方で把握するよう努めた。
　その他の日程においても、リトルインディア視察や各自食事などは班を軸として行うようにし、個々人が自主的・能動的に海外で行動し、実際に自分の興味があるものを視察、

見学できることを意義として班別自由行動を今回遠征においては行ない、達成することができたように思われる。

Ⅲ．遠征事前活動・準備について

1.　田村耕太郎氏講演会

文責　3 年　染谷駿介

【日時】2014 年 4 月 11 日　(金)

【場所】一橋大学国立キャンパス 2201 教室

【概要】

シンガポール遠征に向けての部員の事前勉強および新歓期にて新入生にバレーボール部の活動紹介をすることを目的に、NUS リークアンユー公共政策大学院特別顧問を務められている田村耕太郎氏を講師に招き、本学の掲げる「グローバル」を題材に講演会を開催した。本講演会は、麻植先輩（S38 卒）のご紹介により実現したもので、講演会後の食事会では田村氏と部員との懇親の機会が持て、この結果、田村氏にはその後の遠征準備におけるご協力をいただけることとなった。部員の手で講演会のチラシとポスターを作成、学内にて配布・掲載を行い、ウェブサイトや SNS も活用して宣伝を行った。参議院議員としての経験や国際的に活躍されてきたご経歴をもとに、国際的な教養としてのリベラル・アーツの重要性、グローバル世界の中にある日本の行く末について熱弁され、終盤に用意した質疑応答の時間も充実した盛り上がりとなった。

【感想】

部で初めての講演会開催ということで前例がない中での準備となったが、卒業生、学校職員の方々のご協力のもとに開催までこぎ着けることができた。田村氏は国際的な知見が豊かであることはもちろん、政治家として日本の行政に深く関わってきたご経験を元に、日本人の学生としてどうあるべきかを我々に問いかけ、大変刺激のあるお話をしてくださった。国際性で有名なシンガポールでは自ずと教育もグローバルな競争の下に置かれているわけだが、一方で日本は言語教育のレベルが低く、大学もネームバリューを求めるものとなっている。日本人が今後世界で活躍していくためには世界に目を向けなければならないことを痛感させられた。あらためてグローバルな見識を広めることを目的とした海外遠征の意義深さを感じたと共に、遠征へのモチベーションが高まったように思う。

2. 山田章氏講演会

文責　3 年　染谷駿介

【日時】2014 年 5 月 7 日　(水)

【場所】一橋大学国立キャンパス 304 教室

【概要】

シンガポール遠征に向けての部員の事前勉強および新歓期にて新入生にバレーボール部の活動紹介をすることを目的に、前日本シンガポール協会理事長を務められた山田章氏を講師に招き、シンガポールの歴史や特色を題材に講演会を開催した。本講演会は吹野先輩（S40 卒）のご紹介により実現したもので、講演会後の食事会では山田氏と部員との懇親の機会が持て、山田氏にはその後の遠征準備におけるご協力をいただけることとなった。部員の手で講演会のチラシとポスターを作成、学内にて配布・掲載を行い、ウェブサイトや SNS も活用して宣伝を行った。東南アジアの先進国たるシンガポールが今の地位を築く過程において、その当初から支援をされてきたご経歴をもとに、シンガポールの実情と日本が学ぶべきことについて熱弁された。最後の質疑応答では部員から積極的に質問の手が挙がり、充実した盛り上がりとなった。

【感想】

田村耕太郎氏講演会が日本への視点を重視していたのに対し、山田氏はビジネスマンとしてシンガポールの発展に貢献してきたご経験を元に、シンガポール発展の過程や現状について細やかな講演をしてくださった。大企業への就職率が高い本学の学生はグローバルに活躍することを期待されており、そのためにはシンガポールは学ぶべきことの多い国である。ビジネスに関すること以外にも、シンガポール人が日本をどう見ているのかということや、両国の共通点といった点にも触れられ、受講者はこれまでよりもシンガポールを身近に感じることができたと思う。質疑応答においては、部員の質問に丁寧にお応えいただき、部としてシンガポールへの理解を深めることができた。

3.　事前勉強会

文責　2 年　和田幸菜

【日時】2014 年 7 月 5 日 （土） 、7 月 19 日 （土） 両日 14：00~16：00

【場所】一橋大学小平キャンパス　カフェテリア、一橋大学国立キャンパス　1303 教室

【概要】

前回遠征同様、今回もシンガポールに行く前にシンガポールの知識を得ることを目的として、2 回に分けて事前勉強会を行った。発表は部員を 5~6 人に分けた計 5 班に分かれて行った。テーマはシンガポールの基礎知識、歴史、大学制度、カジノ、少子高齢化の 5 つで、1 回目に前半 2 班、2 回目に後半 3 班が発表を行った。どの班も、各々準備してきたパワーポイントやレジュメなどの資料を活用し、完成度の高いプレゼンテーションであった。特に 1 年マネージャーの秋野は帰国子女で英語が得意であるため、英語講座を開いてもらった。英語、特にスピーキングの苦手な部員にとってはとても有意義な時間になった。

【感想】

田村氏・山田氏の講演会などを経てシンガポールについてそれなりの知識は身に着けつつあったものの、この事前勉強会は講演会とは異なり自分たちで自主的に調べるという点に大きな意味があったように思う。また、実際にシンガポール遠征中もこの勉強会が生かされた時がしばしばあった。例えば、ＮＵＳ学生との討論会にて「教育の平等を追求すべきか」というテーマについて議論している際、ＮＵＳの学生がシンガポールの教育制度について私たちに説明してくれた。シンガポールは日本とは教育制度が異なり、能力主義に基づいた特殊な教育制度を導入している。事前勉強会にて既に教育制度について理解していたので討論がより活発になった。更にシンガポールはマナーに厳しい国である。例えば、公共交通機関での飲食禁止などについては罰金が科される。海外に行く際は、日本とは法律もマナーも環境も違うため気を付けるべきことが多々ある。このようなことを全体で確認できたのも良かったと思う。今後も遠征を続けられるのならば、このような勉強会も続けていくべきだと感じた。

4.　OB の方々との事前ミーティング

文責　3 年　太田圭亮

2013 年 10 月下旬～11 月上旬

麻植さん、内海さん、宗田さん、仁井さん、石川先生にそれぞれ時間を作っていただき、まずは NUS と SMU（シンガポール経営大学）のどちらに交流を打診するかをメインにアドバイスをいただく。両校を総合的に判断して第一候補として NUS へ打診する方向性へ。

また、宗田さんに OB 会としての海外遠征担当をやっていただくことに決まる。石川先生から自由行動の導入を勧められる。

11 月下旬

遠征打診先については 12 月上旬に内海さん、宗田さんが麻植さん、古野間さん、吹野さんと面会して話し合うのでそれを待つことに。治安など様々な点を考慮して進めていく必要性を確認。

12 月上旬

麻植さん、古野間さん、吹野さん、内海さん、宗田さんによるミーティングで NUS を第一候補として打診することを決定。親善試合申し入れ際に使用する introduction sheet（添付）の作成にかかる。

（12 月下旬に NUS に最初の打診を行い、受け入れを快諾される。）

2014 年 1 月中旬

なぜ他の場所でなくシンガポールなのか、そしてシンガポールで何がしたいのかの説明のための OB 向けプレゼンテーションを国立キャンパス教室にて行う。熱意を持ったプレゼンを行った結果、OB の方々の理解を得ることができた。

また、現地には宗田さん＋1 名の OB が同行してくださることに。

2 月上旬

OB 会幹事会にて第 3 回海外遠征先としてシンガポール NUS への交流が正式に同意される。

4 月上旬

学生支援課を通じ、如水会に国際交流助成金の申請を行い、承認を受けた。

5 月中旬

石川先生にお話を伺う機会をいただき、英語でアカデミックな議論をするためには全編

ディスカッション形式では難しいであろうこと、全１時間の内容で、前半こちらからのプレゼン、後半それに対する質疑応答という形ならアカデミックな議論になるのではないかという指摘をいただき、プレゼンテーションの準備に取り掛かる。

7 月中旬

石川先生に暫定版として完成したプレゼンを見ていただき、スライドの枚数などについてのご助言をいただく。

5 月～7 月

月に１回という形で、ご同行予定の宗田さん、仁井さんとの事前ミーティングを合計 3 回行い、確認事項の共有を行い、士気を高めた。

内海さんや白石さんにも一部同席いただき、ご助言をいただいた。

7 月下旬に行った最終ミーティングでは、最終確認とともに、決起集会としていよいよ目前と迫った遠征への志気を高めた。

5.　危機管理セミナー

文責　1年　秋野有理子

【日時】2014年7月15日　(火)

【場所】一橋大学国立キャンパス本館1階特別応接室

【概要】

シンガポール遠征に向けての部員の海外における危機管理についての事前勉強を目的に、バレーボール部部長の石川城太先生のご紹介により、一橋大学国際化推進室ディレクターの鈴木あかね氏を講師に招き、「安全で安心な海外研修のために」と題した危機管理セミナーを開催していただいた。「事故は起こるもの。事前に対策をシミュレーションして備えそう。」という考え方をもとに、窃盗や遺失・拾得物、傷病などへの対策について詳しい説明を受けた。海外安全5原則として、渡航先を知ることや目立たないこと、スキを見せないことや不信な兆候に事前に対応することなど、覚えておくべきことを整理していただけたため、しっかりと確認することができた。また、水道水に関して、シンガポールの水道水は飲めるが心配な人はミネラルウォーターなどを飲むようにということで、親善試合におけるドリンクをどうするか、あらかじめ考えることができた。危機管理シミュレーションでは実際に部員が同じ状況になった場合を想定することで、楽しく勉強することができた。

また、このセミナーの内容を後日、他の部員とも共有し、全員が危機管理についてきちんと理解した上でシンガポールへ出発することができ、大変良かったと思う。

【感想】

危機管理セミナーがあったことにより、危機管理に関してきちんと勉強してから出国することができたのは、非常にありがたかったと思う。今回の遠征で大きな怪我や病気をせずに帰国することができた理由のひとつにはこのセミナーの存在があるだろう。自分は、シンガポールは治安が良いから大丈夫だと過信していた面があったため、直前にこのような機会を設けていただいたことにとても感謝している。自分が一番印象的だったのは、緊急連絡先をメモしておくように、というアドバイスである。実際、シンガポールで先輩の携帯に電話をかける場面があったので、電話番号をメモすることを怠らずにきちんとやっておいて本当によかったと思った。シンガポールから帰国してからの感想としては、やはり「事前に対策をシミュレーションしておくことが大切である」ということだ。海外滞在中は普段と異なる環境にいるため、どうしても冷静に物事を考えることができなくなってしまう。そういった時にやはり、危機管理を事前にシュミレーションしておくことが非常に重要である、ということを今回の遠征で実感した。将来の海外遠征の前にもぜひともセミナーを受講すべきだと思った。

Ⅲ．今後の展望

海外遠征の大きな目的の一つは、海外の学生との交流である。この交流をより深いものにするためには、1 回かぎりの交流ではなく、反復的・双方向的な交流が不可欠である。第 1 回遠征の西オーストラリア大学バレー部の学生の受け入れは東日本大震災のため残念ながら中止となってしまったので、かねてよりの目標であった海外校バレー部（NUS バレー部）本学訪問受け入れを 2015 年に実施することも検討していきたい。受け入れによって、学生間の親睦が深まるのみならず、彼らに日本の良さを伝えようとする過程において日本はどのような強みや資産を持っているのか考える良い機会になると思う。

また、第 4 回遠征の行先はまだ決まっていないが、再びシンガポールに赴いて NUS の学生と親睦を深めるのも良いし、第 1 回、第 2 回の西オーストラリア大学、中国人民大学を再び訪ねるのも良い。また全く新しい海外の大学に行き、新たな発見を得るのも悪くはないと思う。いずれにせよ、定期的な交流ということが、当部の海外遠征の目的の一つであるので、次回以降には 1 校または 2 校を選定し、順繰りに遠征先とすることも検討したい。今回の NUS、Yale-NUS の学生のレベルは非常に高く、同時に日本に大変関心を持っていて親日的であったので、これらの大学とは再び交流したいと思っている。

Ⅳ．参加者感想文

感想文１　　商学部４年　大原諄也

シンガポールは、国土は狭いながらも貿易・観光に根差した経済面での優位性や先を見据えた政策による発展性により、今後の世界情勢におけるハブ的存在を確立している。教育面においても、英語を中心に据えた国際的活躍を期待できる人材づくりが行われている。今回の遠征において、私は２つの目標を掲げていた。１つは、事前調査では得られないシンガポールの実情を知ること。もう１つは、英語によるコミュニケーションである。各目標について記述していく。前者において、事前調査によってシンガポールの迅速な問題発見・解決能力の高さに驚嘆すると共に、シンガポールと日本との政府間関係よりも民間企業間の関係が濃密であったと感じられた。そのことから事前調査では得られなかったシンガポールの問題点や、シンガポールと日本との具体的な関係性について現地調査により実情を把握したく感じた。今回の遠征において、この疑問への回答は「三井物産訪問」及び「日本大使館訪問」において見解が得られると考えた。実際に現地に赴いた際は、手厚い歓迎に加え、御厚意による真摯な対応をして頂き、非常に有意義な時間を過ごさせて頂いた。三井物産においては、シンガポールのハブ的機能増進を掲げる民間企業の誘致の話から始まり、シンガポールの諸要素の分析から今後のシンガポール市場の可能性、またアジアの最後の新規市場であるミャンマーについての御話を伺えた。日本大使館においては、政府間交渉に携わるため様々な話を伺えた。シンガポールと日本の関係は良好で、かつ共通する少子高齢化等の問題を有する。またシンガポールにおいては都市計画が今後の問題として掲げられ、地下開発と言う日本の得意とする問題を有する。この両者間において日本の有する都市開発対策能力をシンガポールの諸問題に役立てたり、またシンガポールの政府一貫型の政策対応を見習うべきであったりと、様々な諸問題の話を伺えた。以上からシンガポールは様々な諸問題を抱えながらも政府一貫して対策を様々な国との関係から対策を講じてきたことが分かった。事前調査からあったシンガポール政府の対応能力の高さを実感できた。後者については、国際化が叫ばれる昨今において、英語を使用できる環境は大変好ましい。前回の中国遠征では叶わなかった、英語を公用語とするシンガポールでの英語能力の向上が期待された。実際に街に出るとほとんど日本語は通じない。一方で英語が一般的に使用されている。市街散策や食事所、NUS 及び NUS-YALE との討論会・交流会において、英語の使用を余儀なくされた。しかし、英語でも伝えようとする姿勢や何かを話そうとする姿勢を構えられ、拙くとも英語によるコミュニケーションが幾度も実践できた。一方で今後の更なる英語力向上が必要であると感じた。以上の様に、個人的目標は適えられただろう。これだけにとどまらず、シンガポールの文化・風土、海外学生との関係構築など、国際的な見識・経験等を得られたことが今回の遠征の最も大きな収穫であった。

感想文２

今回の遠征では大きな事故も無く無事に帰国することができました。シンガポールは交通の利便性も高く、治安の良さを実感しております。ホテルの目の間には深夜まで営業している中華料理屋もあり、また、街を行くほぼすべての人が英語を話せたこともあって非常に過ごしやすい環境でした。

National University of Singapore(NUS)のバレーボールチームとは、NUS キャンパスツアー、交流試合、討論会を行いました。キャンパスツアーにおいては、その広大なキャンパスと恵まれた施設に圧倒されました。Utown という学生寮とその周辺施設には、カフェテリアや体育館（ホール）といった施設のほかにもかの有名なマリーナ・ベイ・サンズを設計した建築家が同じデザインのプールを作っていました。

国立大学にすら屋上プールが存在するシンガポールの資金力や学生に対する環境の整え方には本当に驚かされました。肝心の交流試合では、時間がある限り試合を行うという方法で、最終的には 19 時から試合を開始し、23 時ごろまで試合を行いました。

相手は平均身長でこちらを上回り、またシンガポールのナショナルチームのメンバーも複数人いたこともあり、残念ながら 1 セットを奪うことしかできませんでしたが、22 人全員が出場し、試合後にはシャツ交換も行われるなど終始友好的な雰囲気で試合が行われました。討論会では、限られた時間の中でこちらが用意したプレゼンを発表し、質問を受けつつ進行しました。

後半には少人数のグループを作り、積極的な意見交換を行いました。

特に、互いの学生生活については話が盛り上がり、討論会後の食事会においても同じ話題を継続するグループが多かったように感じています。

Yale-NUS College との親睦会では、設立 2 年目の新しい大学である Yale-NUS College を選び入学した挑戦的な学生の気質に触れ、普段日本ではあまり感じることが出来ない刺激を受けることが出来たと感じています。

レジデンシャルカレッジという日本ではあまり身近に感じることがないスタイルの学校と、その施設を嬉々とした様子で説明し案内してくれる学生たちは本当に刺激的でした。

また、学生たちは勉強が大好き、教授も同じ場所で生活するこの環境が大好き！と言い切るほどで、一橋バレー部の学生がそのあとの討論会に向けて不安を感じるには十分なほど勉学に対する前向きな姿勢を感じ取ることが出来ました。

その討論会では、本当に多くの Yakle-NUS の学生に参加してもらい、一橋 3～4 人対 Yale-NUS2～1 人くらいのバランスで話をすることが出来ました。

話題は互いの学生生活に対する事が多く、向こうの学生の日本に対する興味の強さを感じる事が出来ました。両校共に日本に対する理解・興味のレベルは非常に高く、特に漫画やアニメといった話題になると共通の話題が溢れてきました。

Yale-NUS には海外に行き勉強を行うショートステイプログラムが充実しているようで、

そのプログラムを利用して日本を訪れたことがある学生も何人かいました。
そういったプログラムを利用するに当たっては学生の負担はほとんど無いようで、
シンガポール政府の教育に懸ける情熱や投入する資金の潤沢さの一端を垣間見ることが出来たように感じています。また、日本大使館や如水会シンガポール支部・三井物産訪問などにおいては、
現地で生活し、現地で仕事をしているグローバルな視点を持つ日本人の方々と交流する機会をいただき、今までドメスティックな考え方をすることが多かった現役部員たちも、
今回の訪問をきっかけにそういった視点・考え方に気付くことが出来たのではないかと思います。特に私自身においては、今後のシンガポールと日本、強いては他国と日本の関係を個のレベルで気付いていく事は私たちのような若い世代が作り上げていかなければならない、そうした責任を背負っているのだということに気付き、大局的な視点と、個人の間での密接な関係を継続的に気付いていこうという想いを強く抱きました。部員それぞれ感じた事は多くあると思いますが、今回の遠征で感じたことを今後の学生生活や人生に活かしてもらうことが出来ればと考えています。シンガポール市内を観光するにあたっても、綺麗な街並みや豪華な観光施設を目の当たりにし、この国の勢いや外国人観光客に対するホスピタリティをまざまざと見せ付けられました。多くの部員は自身の語学力に歯がゆさを覚え、今後の勉強により一層力が入ることだと思います。今回の遠征を通じて、事前準備における諸先輩方のお力添えや、現地での宗田さん・仁井さんのサポートがなければここまで充実した遠征にすることはできなかっただろうと確信しております。これほど充実した訪問先を揃えることが出来、各訪問先で非常に濃厚な体験をすることが出来たのも皆様のサポートがあったからにほかなりません。また、現地では宗田さん・仁井さんにはあらゆる場面で支援して頂き本当に助かりました。
特に現地の学生や社会人の方々とお会いする際、宗田さんには幾度となくスピーチをしていただきました。
豊富な経験を交えて、部の紹介や大学の紹介などをして頂き、本来であれば私たちがするべきだった事まで宗田さん・仁井さんのお力をお借りすることとなり、申し訳なく感じると同時に、正直な話私の貧相な英語のスピーチだけではきっと何も伝える事が出来ずに終わってしまっていた事だろうとも感じており、お二人に御同行して頂いて本当に良かったと感じています。英語でのスピーチも今回の遠征で痛感した私の課題となりました。今後こういった機会はなかなか得ることができませんが、来るその時に向けて精進しようと考えています。

感想文３

法学部４年　長沖佳郁

前回の中国遠征から二度目の海外遠征となったが、今回自分が大きく責任を負ったのがＮＵＳの学生に向けたプレゼンの制作であった。
中国人民大生との討論会では、こちらから相手に対して正式に自分たちの問題意識を提示することはしなかったため、とても不安な要素が大きかった。
相手はシンガポールでエリートコースを歩み、自分たちよりも勉強に対して熱心だというイメージが強かったため、自分たちのプレゼンをどのように受け取ってくれるのかを常に気にしながら作っていた。
しかし、プレゼンを通して気づいたことは、いかに相手に伝えようとする姿勢を見せるかが大事であるということだった。つたない言葉でも自分の思いを伝える姿勢を相手は真剣に受け取ってくれた。将来英語を使って仕事をする機会が多いと思うので、今回のプレゼンはとても良い経験となった。

また、今回の遠征では前回と大きく違い自由行動をする時間がとても多かった。というのも前回の中国は尖閣問題で治安が悪く、班行動といえども危険が大きかったからである。その点今回はとても治安が良く自由に行動することができたため、部員一人一人が主体的に考えることができたのではないかと思う。
あえて反省点として挙げるとするならば、班別自由行動でも人数が多かったかもしれないという点である。班の中でも行動を班長に任せる風潮があったりしたので、二人一組などもっと少人数での自由行動を考えてもよいのではないかと感じた。

そして、シンガポール国内の様子を観察すると本当に観光立国としてのスタイルが確立されていると感じた。リゾート地としてのサービス、おもてなしの心は日本よりも勝っているのではないかと思った。東京オリンピックを控えた日本も、シンガポールから学べるところが多々あるのではないかと感じた。

今回で自分は最後の遠征となるが、今までの素晴らしい経験を踏まえて引退・卒業後も積極的に現役の支援をしていきたいと思っている。如水会のご支援も引き続きいただきながら、さらに充実した遠征になればと願っている。この海外遠征が一橋大学バレーボール部の良き伝統となれば幸いである。

末筆ながら、各方面でこの遠征にご支援いただいた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

感想文４

経済学部３年　佐々木悠祐

まず、はじめに、今回の海外遠征を実現させるにあたって、多大なるご支援をしてくださった OB の皆様、相原と太田をはじめとした海外遠征担当、今回の学生交流に快諾してくださった NUS、Yale-NUS の学生の皆様、ガイドを務めてくださったアイリンさんに心からの感謝を申し上げます。

今回のシンガポール遠征は自身 2 度目にあたりますが、前回の中国遠征以上に充実していたと感じられました。連日、夜にホテルに帰るころには、部員の顔に達成感や疲労感が表れており、とても内容の濃い日々を過ごすことができたのではないでしょうか。今回は自由行動の時間も多く設けられていましたが、個人的に最も印象に残っているのはシンガポールの学生との交流です。バレーボールでは予定していた時間を超えて多くのセットの試合を行い、最後にはお互いのチームシャツを交換したりしました。また、討論会では、普段使わない拙い英語を駆使し、不器用ながらも積極的に会話をして交流できたのは良い思い出です。相手も国は違えども、同じ年代の若者であり、すぐに打ち解けられ、SNS を通じて友達になり、日本に帰国した後もメッセージ交換を行いました。この友情が今後続いてくれることを希求しております。

シンガポールは日本から飛行機で 6 時間ほどの距離で時差は 1 時間です。気温は真夏の日本とたいして変わりなかったように思えますが、湿度が少し高かったです。しかし、シンガポールには蚊などの害虫はなく、治安がとてもよかったので快適に過ごすことができました。地下鉄やバスなどの交通網も発達しており、港湾には多くの物資を積んだ船が停まっていて、シンガポールのアジアにおける国力の高さを目の当たりにしてきました。街中には日本でもおなじみの企業の看板をよく目にし、シンガポールが外資を多く誘致していることもわかり、事前に日本で、部員全員で予習したことが実際に自身の目で確認できました。

今回のシンガポール遠征で私は英語の勉強不足を痛感し、今後勉強してもっと英語が話せるようになりたいと思いました。私たちがグローバルな時代に生きていることを実感し、海外に対する意識が少し高まったような気がします。今回の遠征で学んだことを今後の人生で活かし、豊かなものにできればいいなと思っております。重ねて申し上げますが、海外で貴重な体験をさせていただいた様々な人たちに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

感想文５

法学部３年　伊奈俊英

バレーボール部として３度目の海外遠征であった今回のシンガポール遠征は、私にとって２度目の海外遠征でもありました。今回は英語圏ということもあり、前回の中国遠征と違い、今まで英語を勉強してきた成果が発揮される大変よい機会になったと思います。私自身、実際に英語でコミュニケーションを取ることの難しさを体感し、今まで以上に英語の学習を行っていかなければならないと痛感しました。

言語の壁にぶつかったシンガポール遠征でしたが、内容は非常に充実していて、多くのことを学ぶ機会になったかと思います。現地の大学生である NUS・Yale-NUS との交流、シンガポール如水会支部の方々が多く在籍しておられる三井物産シンガポールや日本大使館 JCC の訪問、リトルインディア・アラブストリート・チャイナタウンなど様々な文化が共存する地域の散策など日本にいては絶対に体験することができないすばらしい遠征であったと思います。特にリトルインディア・アラブストリート・チャイナタウンはシンガポールという一つの国家の中に様々な文化・宗教が内在していて、それが独自に発展している地域で、一つの国家にいながらもイスラームやヒンドゥー教といった宗教を根幹にするいろいろな文化を体験することができ非常に貴重な経験が出来ました。また、現地の大学生との交流は日本の大学生との相違を考えさせられる機会になりました。彼らは日本の大学生よりはるかに勉強に対する意識が高く、なおかつ学業に対し真摯に取り組んでいると感じました。自分たちも今まで以上に学業に対し真面目な姿勢で取り組んでいかなければならないと感じました。

今回の遠征を通じて多くのことを学ぶことができたのは周りの人のたくさんの支え、支援があったからだと思います。特に支援金を出していただいた如水会、OB の皆様、今回の遠征をセッティングしてくれた相原・太田をはじめとする海外遠征担当、同伴してくださった OB の宗田さん・仁井さん、NUS・Yale-NUS の方々など多くの人の支援のおかげで成り立ったものだと感じました。最後になりますがこの場を借りて御礼申し上げさせていただきます。本当にありがとうございました。

感想文６

経済学部３年　牧村優美

シンガポール遠征に際してたくさん準備をしてきました。たくさんの人にご協力いただき、支えられて私共の海外遠征が成り立っていると日々実感する数ヶ月でした。大学やOBの方々はもちろんのこと、学外から様々な形で支援してくださった方々にも特別の感謝の気持ちを感じました。
遠征の数ヶ月前から田村さんや山田さんをお招きし、シンガポールについてお話をしていただき、また自分たちもシンガポールのことについて勉強をしました。個人的に行く旅行ではこのように下調べして行くこともなかなかないので始まりから旅行とは違うと実感していました。また特に有意義だったのがNUSの学生へのプレゼンテーションの準備でした。三年生を中心にシンガポールの大学こと、日本の大学のことを調べ、英語でプレゼンテーションをする練習をしました。授業の中で英語のプレゼンテーションをすることはありますが、それ以上の緊張感をもって準備していました。向こうの学生は英語のネイティブスピーカーであり日本語を話せないということがその主な原因だったと思います。
このように準備をした上で、いよいよシンガポールへの渡航だったので、日本を出国する時には期待と少しの不安とでいっぱいでした。
特に印象に残っているのはやはりNUSの学生へのプレゼンテーションです。プレゼンテーションの後にNUSの学生と話しました。普段勉強はしているものの話す機会がない英語を話すとても貴重な機会でした。またシンガポール人の学生と話し、自分たちの価値観彼らの価値観はそんなにも違わないのではないかと感じました。同じアジアで、また厳しい受験を乗り切ってきた彼らなので私たちと考え方も近いように感じました。教育の親の金銭状況により生まれる格差問題について話し合ったのですが、私が話した学生は、「確かに裕福な家庭の子供は高学歴になりやすい。だから自分も将来たくさん稼いで自分の子供にいい教育を受けさせたい。」と言っていました。「格差はなくすのが理想だけれども実際になくすことは困難だからそうしたい。」と言っていました。私が考えていることと同じでした。すごく親近感がわきました。また自分が日本で調べて行った内容と違うこともありました。私はシンガポールの優秀な学生は政府の奨学金で海外の名門大学に行くという記事を日本で読んだのですが、実際はそのようなことは聞いたことがないと彼は言っていました。むしろNUSで奨学金をもらって学ぶ優秀な学生が多く、もしくはYaleNUSのように海外の有名大学がシンガポールキャンパスを作っているのでそこに行くと言っていました。この日は議論のあとに皆で夕食を食べ、大学生活や恋愛についてなども話し大変盛り上がりました。Facebookでも友達になって再会を誓い合いました。
次の日にはYaleNUSの学生と交流をしました。今度はシンガポール人の学生だけでなく、オーストラリアや中国、カナダ、日本など各国の学生が集まっていました。彼らは話しているだけでもとても優秀なことが伝わってきました。話し方や佇まいが日本の学生とあま

りに違っていました。明瞭にわかりやすく自分の言いたいことを伝え、人とコミュニケーションを取ることが上手でした。よく世界では日本人は声を上げないからだめだ、なんて言われますがそれを実感した日でした。難しい話はしていないけれど、黙っていてはいけない、相手のペースに圧倒されてはいけないと必死で話を聞き、話しました。本当に貴重な経験でした。彼らともFacebook上でも友達になり、再会を誓い合いました。
シンガポールに行って学生、現地の人と関われたことが一番嬉しかったです。なかなか優秀なNUSの学生と関わる機会はありません。一橋に入ってこのような機会を頂き大変嬉しく思いました。次にシンガポールに行く時には、彼らともっと難しい話ができるように、自分の能力を磨きたいです。知識をつけようと思いました。最先端を生きていく彼らに数年後会った時恥じることのないような私になろうと思います。
最後にもう一度、遠征に関わってくださった全ての方に感謝の気持ちを伝えたいです。私どもだけではなにもできませんでした。それを痛感いたしました。その方々に恥じないよう、この機会を無駄にしないよう、これから世界に出ていける国際人になる努力をしようと思います。
今回の遠征に関わり、支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。

感想文７

経済学部２年　宇野宏祐

一橋大学体育会バレーボール部は、上記の日程において第三回海外遠征を実施した。（詳細の日程については別記「日程」参照）オーストラリア・中国に引き続き、今回は経済発展著しくまた英語圏であり治安の面からも安定の見込めるシンガポールを遠征地として選択し準備を進めた。部としては 3 回の勉強会を行い、この遠征に対し各自が明確な目標を持って遠征に臨んだ。

今回の遠征において、私は海外でのコミュニケーションとシンガポール独自の文化への接触・順応を目標に掲げて渡星した。まずここまで英語を苦としていた私は、あらゆる面において語学力不足を強く実感した。看板の表記をはじめ現地でのさまざまな場面での会話など、ことあるごとにごまかしのきかない英語力の無さが浮き彫りになった。最たる例として、NUS バレーボール部との討論会・Yale-NUS 大学の学生との交流会があがる。自分の英語がコミュニケーションツールとして使えるに達していなかったこと、いかに日本語ベースの考え方をしていたかということを肌で感じることができ、今後の語学学習に対するモチベーションにつながる経験となった。

また、多民族国家という枠組みでなりたつシンガポールの特徴を感じることもできた。リトルインディアやチャイナタウンといった文化のすみわけ、モスク・寺院などの多宗教施設、多くの商店で見られた多言語話者などは、大いにその点を感じさせる要素であった。たまたまモスクにて宗教イベントに遭遇したが、そのイベントに参加する人々が日々の生活の中で疑問なくイベントをこなしていることを考えると、宗教上の考え方の差や、果ては私たちの思う「当たり前」ということの危うさを再認識させられた出来事であった。

私はこの海外遠征を通して、あらゆる意味で「自己否定」を痛感した。このままではいけないと感じた語学力しかり日々の生活における自分の考え方しかり、そのどれもが今の自分にとって前向きな成長につながるものであった。今回の遠征で感じたこのような課題を次回遠征で活かせるべく今後過ごさねばならないと感じた。

最後になりましたが、この遠征が可能となるにいたった主要因である OB の皆様の多大なるご支援、如水会のご協力に謝意を表してシンガポール遠征の報告とさせていただきます。ありがとうございました。

感想文８

法学部２年　長尾知樹

この度のシンガポール遠征では、海外に出てみなければ気がつかなかった多くのことを学びました。

まず、NUS 及び Yale-NUS の学生との交流会では、自分の英語力の低さを痛感しました。自分の言いたいことを上手く表現することができず、また相手の言っていることを理解するのに時間がかかりました。さらに交流会を通じて、学生の勉強に対する姿勢や学習環境が日本とは違うと感じました。交流会で会話をした学生達は、日本の学生より、みな学習に対して意欲的で、主体的に取り組んでいるように思いました。また大学の施設や学生への支援も日本より充実したものでした。

次に、一橋大学の卒業生である三井物産シンガポールの方々や日本大使館の竹内大使のお話を伺い、グローバル化が進む世界での日本のあり方について考えることができました。日本がシンガポールから見習うべき所や、逆にシンガポールが日本から取り入れた方が良いことを考えるにあたって、客観的に日本をみることができました。

リトルインディア・アラブストリート・チャイナタウンの散策では、多文化社会を肌で感じることができました。それぞれの地域で異なる街並み、人々、宗教を、一つのシンガポールという国の中で見られるのはとても新鮮でした。これらの地域を散策する中で、日本語を話せる人々に多く会いました。彼らは私たちが日本人だと分かると、友好的に話しかけてくれ、日本がとても愛されているように感じました。

このように、今回の海外遠征では、更なる英語学習の必要性を感じ、またシンガポールからみた日本の姿を考えることができました。この遠征を通じて得られた経験を今後の大学生活の学習に反映させようと思います。最後にこの遠征を支援して下さった、如水会の方々、一橋大学バレーボール部 OB の方々、NUS 及び Yale-NUS の方々に心から感謝申しあげます。

感想文９

法学部１年　小林稔啓

今回のシンガポール遠征は、自分の視野の狭さや新鮮なアイデアを考えさせてくれて自分の人生にとってとても大きく貴重な経験となりました。

まず、自分自身にとってこのシンガポール遠征が初の海外ということもあり、自分の英語力をはじめとしたコミュニケーション能力の低さに気づかされました。班別行動で訪れたリトルインディアの喫茶店では、自分はコーヒーを二つ頼んだつもりが、コーラが二つ出てきてしまいました。また、NUS の生徒との討論会においては、なかなか自分の言いたいことが英語で表現できずに、積極的に話をすることができなかったように思えます。その反省を胸に挑んだ Yale-NUS の生徒との交流では他愛もない話も交えながら楽しくお話しをすることができ、とても有意義なものとなりました。

次に、私は世界で活躍する一橋大学の卒業生の方々からのお話を聞いて、大きな刺激を受けました。三井物産では、グローバル化した国際社会の中で日本はどのように振る舞っていくべきかなどといった、とても興味深い、スケールの大きなお話しを聞くことができ日本と海外の間の最前線で働く方々の問題意識を肌で感じることができました。JCC では大使の竹内氏の学生時代のお話を聞いて親近感も湧きましたし、日本とシンガポールを結ぶための FIVE　FOCUS　AREAS などといった様々な工夫を聞いて感心を覚えました。これらの訪問を通して、国際的な舞台で働くことはとても大変なことだけれども、その分やりがいがあるのだということを感じました。

そして何よりも私はバレーボールの素晴らしさというものを感じました。NUS の生徒は私たちよりも一回り大きく、私たちはなかなか思うようなバレーができませんでしたが、両チームとも一生懸命にプレーし、試合が終われば皆笑顔で握手し、談笑しながら集合写真を撮り、一橋バレー部と NUS バレー部の一体感を感じずにはいられませんでした。改めて、バックグラウンドの違う人々を繋いでくれるバレーボールを含めたスポーツは素晴らしいなと感じました。ここで築いた一橋と NUS の絆をより強固で持続的なものにしていけたら良いなと思います。

最後にはなりますが、この遠征を支援して頂いた如水会の方々、一橋大学バレーボール部 OB の方々、温かい歓迎をしてくださった NUS の方々、Yale-NUS の方々、この遠征に関わってくださった皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。今回させていただいた貴重な経験を生かして自分の人生をより豊かなものにしていけたらと強く感じています。

感想文１０

商学部１年　辻佳奈子

この６日間のシンガポール遠征は、私にとってとても意義あるものになりました。これまでの個人的な海外旅行とは異なり、事前勉強会で行き先の文化やマナー、歴史について学んだことで、現地でその違いをより実感できるような遠征でした。シンガポールの夏は日本と似た暑く、湿気が多い気候でした。住んでいる人は中国を始めとした東南アジア系の人が多く、市内には中華料理屋が建ち並んでいました。また工事現場では黒人が働いていたり、お土産屋さんの目の前で雑貨を手作りしていたり、日本にはない光景を見ました。

日本大使館や三井物産訪問ではシンガポールで実際に住み働いている方々から貴重なお話を聞くことができ、特に三井物産訪問後にはお話をしてくださった２名の方とお食事をし、海外で働く女性から直接その生活や考えを聞く機会があったことを嬉しく思います。

またNUSとの交流戦は、相手の学生も楽しんでくれたようで、予定の時間を超えてバレーをしました。NUS、そしてYale-NUSとの討論会&懇親会では自分の英語力を使う良い機会となりました。相手の言うことが聞けなかったり自分の言いたいことがうまく表現できなかったりと、自分の英語の乏しさを痛感し、今後の英語に対する学習意欲につながりました。

多くは時間が決められるなど規律ある集団行動でしたが、その中で認められた自由行動の時間は有意義なものでした。有名な観光地やシンガポール料理を楽しむことができたのも一つですが、何より現地の方と触れ合える機会が多くありました。お店の人と会話をしたり、道を聞いたり、班での自由行動日には現地の学生とビーチバレーもできました。初めはぎこちなかった雰囲気でしたが、１つのスポーツを一緒にやるうちに名前で呼んだり自然に会話したりと、距離を縮められたことが嬉しかったです。

この遠征を楽しみ、そして意義があると実感できる充実したものとなったのは、多くの方々のおかげだと思います。実行に関わった皆様に心から感謝いたします。このシンガポール遠征で学んだことを、今後将来を考えるうえで、また生きていくうえで、役に立てていきたいと思います。

V．参考資料

1．収支報告書

一橋大学バレーボール部第 3 回海外遠征(ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ)収支報告書

遠征期間　　2014 年 8 月 3 日～8 月 9 日
参加者　　現役 28 名、付添 OB2 名、合計 30 名。

収入の部

項目	単価(円)	人数	金額(円)	備考
如水会国際交流助成金			¥1,000,000	OB 会立替
OB 会支援金			¥1,650,000	
現役及び付添 OB 個人負担金	¥70,000	30	¥2,100,000	
前回遠征繰越金			¥162,584	
計			¥4,912,584	

支出の部

項目	単価(円)	人数	金額(円)	備考
往復航空券等及びホテル代金	¥138,350	30	¥4,151,364	振込手数料 864 円
海外旅行保険料	¥6,520	30	¥195,600	
遠征準備費用			¥23,414	＊注1
現地費用			¥474,077	＊注 2
帰国後費用			¥3,660	＊注 3
次回遠征繰越金			¥64,469	
計			¥4,912,584	

＊注 1:　お土産代、通信費、文書コピー費、等
＊注 2:　会食費(1 回)、市内見学費、移動費、通信費、等
＊注 3:　持ち帰り外貨為替差損、精算金振込手数料、等

２．シンガポール遠征参加者一覧

H16 一橋大学バレーボール部　第三回海外遠征(シンガポール)参加者リスト

連番	氏名	学年	性別	生年月日	年齢	担当
1	大原　諄也	4	男	1991/9/25	22	
2	槌尾　啓	4	男	1992/1/6	22	
3	小崎　浩平	4	男	1993/2/24	21	
4	長沖　佳郁	4	男	1991/4/17	23	海外遠征
5	池川　悠	4	男	1991/10/10	22	
6	駒　将平	3	男	1992/4/25	22	
7	長尾　悠平	3	男	1991/9/29	22	
8	太田　圭亮	3	男	1994/1/9	20	海外遠征
9	佐々木　悠祐	3	男	1993/8/20	20	
10	伊奈　俊英	3	男	1994/2/25	20	
11	染谷　俊介	3	男	1992/4/24	22	
12	相原　健吾	3	男	1992/11/20	21	海外遠征
13	中澤　曜子	3	女	1993/5/25	21	
14	牧村　優美	3	女	1992/9/24	21	
15	宇野　宏祐	2	男	1992/11/17	21	
16	粟野　一輝	2	男	1994/7/29	20	海外遠征
17	岡田　健吾	2	男	1993/11/10	20	海外遠征
18	長尾　知樹	2	男	1994/12/11	19	
19	大野　沙織	2	女	1995/3/14	19	
20	和田　幸菜	2	女	1994/9/25	19	海外遠征
21	宮口　佑太	1	男	1995/2/28	19	
22	竹内　誠也	1	男	1995/4/7	19	
23	小林　稔啓	1	男	1995/1/9	19	
24	裏田　舜脩	1	男	1995/7/31	19	
25	松浦　弘明	1	男	1994/8/11	19	
26	山浦　拓	1	男	1996/3/26	18	海外遠征
27	辻　佳奈子	1	女	1994/8/17	19	
28	秋野　有理子	1	女	1995/3/21	19	海外遠征
29	宗田　雅彦	OB	男	1951/9/17	62	付添
30	仁井　勝三	OB	男	1953/12/6	60	付添

※年齢は遠征出発日時点(2014/8/3)

３．シンガポール遠征企画書

2014 年 3 月 30 日

2014 年度海外遠征計画書

一橋大学体育会バレーボール部

１．これまでの海外遠征

2010 年度　豪州に遠征。

2012 年度　中国に遠征。

2014 年度はシンガポール遠征を計画。

２．シンガポール遠征の目的

アジアの政治経済における重要国であるシンガポールを訪れ、現地の学生と親善試合や討論会を行うことにより相互交流することで、国際的視野を広げ、国際人としての知見を得ることを目的とする。また、大学体育会運動部の一員としてシンガポールを訪問することにより、単なる個人的な海外旅行では経験できない事柄（政府機関や港湾施設等を視察すること）を実際に体験する。更には他国学生とバレーボールという共通基盤を通じ交流を深めることで部としての活動の充実を図ることを目的とする。

３．海外遠征参加者

・引率 OB　 2 名

・新 4 年生　4 名

・新 3 年生　9 名

・新 2 年生　5 名

・新 1 年生　約 10 名の予定

＝　合計約 30 名（※加入する新入生の人数により多少の増減あり。）

氏名等の詳細は添付別紙の通り。

４．交流先

シンガポール国立大学（National University of Singapore　＝NUS）

バレーボールチーム

５.宿泊先

LINK HOTEL
(50 Tiong Bahru Rd, Singapore 168733, Singapore)

６.実施年月日
2014 年 8 月 3 日～8 月 9 日　現地 4 泊 7 日を予定。

7.日程案・タイムテーブル
１日目（8 月 3 日　日曜）
21:00　羽田空港集合
２日目（8 月 4 日　月曜）
0:30　羽田空港発
6:30　シンガポール空港着
AM　市内見学（JTB 手配のバスツアー）
PM　市内見学後、Link Hotel チェックイン
NT　未定
３日目（8 月 5 日　火曜）
AM　日本大使館等への訪問
PM　NUS バレー部との交流試合
NT　未定
４日目（8 月 6 日　水曜）
AM　NUS 教授によるレクチャー受講
PM　NUS 学内見学・学生討論会
NT　NUS バレーボールチームとの懇親夕食会
５日目（8 月 7 日　木曜）
AM　班別行動による市内自由見学
PM　同上
NT　部員夕食会
６日目（8 月 8 日　金曜）
AM　Link Hotel チェックアウト
港湾施設視察（予定）
PM　ジュロン工業地域視察（予定）
21:30　シンガポール空港発
７日目（8 月 9 日　土曜）
5:30　羽田空港着・解散
以 上。

４、NUS への Introduction Sheet

Presentation Sheet

・About HITOTSUBASHI University

Hitotsubashi University, founded in 1920, is one of leading national universities in Japan. The campus is located in Kunitachi city, in western part of Tokyo. The university is famous in the social sciences and has four departments –commerce, economics, law and sociology. A lot of graduates have been quite active in various fields of business world of not only Japan but also other countries.
Hitotsubashi University has been developing international exchanges with other universities abroad and cooperating with 96 universities in the world. At present, more than 500 international students are studying at the university.

・About Hitotsubashi University history

Hitotsubashi University began as the Commercial Training School established privately in 1875. For the progress of industrialization in Japan and the expansion of its foreign trade, the status of this school was raised and renamed the Tokyo Higher Commercial School. Tokyo Higher Commercial School contributed to Japan's economic growth, and due to this achievement, the Tokyo University of Commerce was finally established in 1920 as the highest institution of commercial education in the country. After WW2, this University was reorganized as a four-year university in 1949, adopting the name of Hitotsubashi University.

・About the Men's Volleyball Team

The Hitotsubashi Men's Volleyball team was born in 1932, and has over 80years history. At present, the team is composed with14 players and 5 supporting staffs.
Our present ranking in the Kanto university men's volleyball league which is organized with more than 100 teams in Kanto region, Japan, is approximately 40th.This volleyball league has been held twice a year (spring and autumn) with long history in Japan.

・About Friendship match with foreign universities

Our Men's volleyball team has held friendship matches and cultural exchanges with overseas universities once every two years. We have visited the University of Western Australia in Perth in 2010 and the Renmin University of China in Beijing in 2012.

The visit Perth in Australia in 2010

We have visited the University Of Western Australia (UWA) in Perth and stayed for five days. We had a match with UWA volleyball team and had exchanged information on university life mutually.
We not only played volleyball games but also studied a lot of things can be experienced only in Australia.

The visit Beijing in China in 2012

We have visited the Renmin University of China and stayed for five days. We had a match with the Renmin University volleyball team placed in the third in all Chinese university volleyball teams. We had discussion on various issues with them, on not only volleyball but other cultural issues.

In addition, we have had a lecture about Chinese issue by the professor of the Renmin University.

Plan to visit Singapore in 2014

We are now planning to visit Singapore in summer 2014, to have a friendship match of volleyball game with a potential good partner in Singapore.

５、遠征先シンガポール選定のプレゼンテーション資料

Current Situation of University and Higher Education in Japan

Hitotsubashi University
Volleyball Club

1

Contents

1. **Current Situation of Japanese University**
2. **The Character of Hitotsubashi University**
   -by comparison with other universities in Japan
3. **The difficulty of entrance exams and job hunting**
   - Does entering elite universities mean a job in a big business?
4. **The Problem of Educational Inequality**
5. **The Topic of Today's Discussion**
6. **Reference**

2

Current Situation of Japanese University

3

History of Japanese University

1 From 1877 to 1945
(The Beginning of Japanese Modern University)

2 From 1945 to 2005
(A change of the Japanese University)

3 From 2005 to 2014
(An over supply of universities)

4

1. The beginning

(1) Imperial University Law was established in 1866.

(2) University of Tokyo was formed in 1877.

(3) University Law was established in 1918.

5

1-(1) Imperial University Law

- Arinori Mori , who established Hitotsubashi University , made this law.

- Imperial University was a place for those who study something that contribute to the development of Japan.

6

1-(2) The First University

- The University of Tokyo was formed in 1877.
(Tokyo Kaisei School and Tokyo School of Medicine was combined into the university.)
- This is the first modern university in Japan.

7

1-(3) University Law

- This law was established in 1919.
- Many university and college is guaranteed by this law.

8

2.A change of the Japanese University

1. Reflection on WW2
2. New constitution
3. Become a independent administrative agency

9

2-(1) Reflection

- GHQ thought that education in Japan supported the war.
- Japan reform its education system by the order of GHQ

10

2-(2) New Constitution

- GHQ made new Constitution because they wanted Japan to become a democratic nation.
- Freedom in study is guaranteed by this constitution.
- In university , people can study without any suppression by government

11

2-(3) Independent administrative agency

- In 21th century, all national university became Independent administrative agency.
- This change aimed at that many national university study more freely than before.
- However, as a result, national university are ruled more strictly.

12

3. An over supply of universities

(1) A number of children's decreasing

(2) Difficulty to reach the capacity number

(3) Making strong purpose

13

3-(1) Children's Decreasing

- A number of children is decreasing rapidly.
- From 1993, the number of 18 years- old population has been decreasing.

14

3-(2) Over supply

- A number of university, college and junior college is increasing .
- However, the number of people at the age of 18 to 22 is decreasing.
- Many universities have difficulty in running for their universities.

15

3-(3) Making strong purpose

- To reach the capacity number, each university makes some plans different from others.
- University of Tokyo takes consideration in changing the season of entering university.

16

Reference (the history of Hitotsubashi)

- In 1875, school of studying business method was established in Tokyo.
- In 1920, based on the University Law, the name of school was changed Tokyo Commercial collage.
- This collage had much trouble.

17

Reference(2)

- After the war, the name was changed into Hitotsubashi University.
- Our university now places importance on globalization
- The traditional of this university also continues.

18

The Character of Hitotsubashi University

-by comparison with other universities in Japan

19

Job hunting in Japan

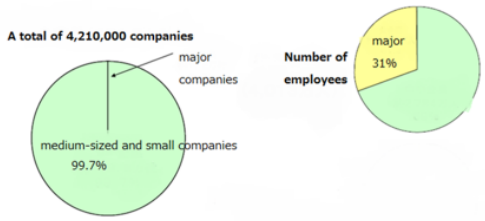
Japan is educational background society.
It is so in the job hunting.

The rate of employment to the big company is judged for one index to show the excellence of the university.

20

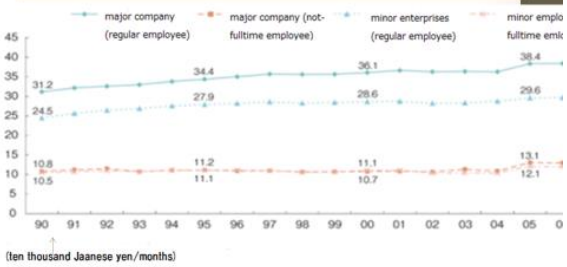
Major companies in Japan

- 0.3% of all of Japanese companies
- 31% of total employees in Japan



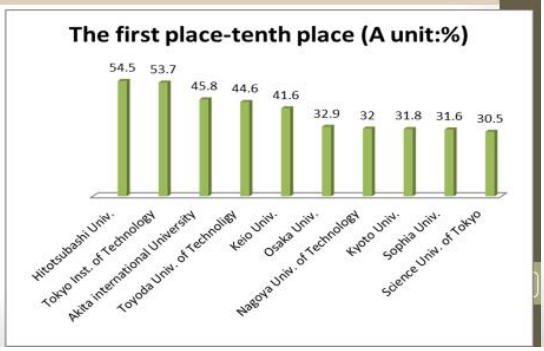
Major companies in Japan

- get much more money than medium sized and small companies



21

The rate of employment to the big company of the graduate (except postgraduate)



The difficulty of entrance exams and job hunting

- Does entering elite universities means a chance to work at big company?

24

introduction

- deviation value of universities
  →an index that shows difficulties of entrance exams

Easy to enter ← 30 50 70 → Difficult to enter

- The rate of employment to the large companies

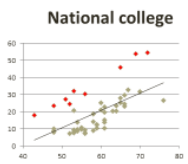
25

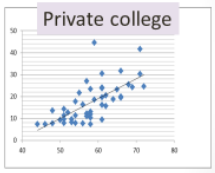
Hypothesis & Methodology

- two hypothesis
- methodology
- data

26

Results & discussion





27

Human capital theory

- What is human capital
- Education and productivity

28

Signaling theory

- What is signaling theory?

29

Common/different point

- The common point
- The different point

30

Conclusion

- Signaling theory or human capital theory?
  →signaling theory
- Students in japan

31

Question

Why do you go to university?

- A. to study to acquire skills for your future
- B. to get school career
- C. neither A nor B
  ex) to study what you are interested in
  looking for girlfriend, playing volleyball

32

model

- $Y_i = \alpha + \beta X_i + \varepsilon$

Where

- Y_i: university/college i's employment rate to large companies
- X_i : university/college i's deviate value
- ε: disturbance term

33

The Problem of Educational Inequality
- Japan case and Singapore case

34

IN JAPAN

There are students who can't study at universities.

Why?

Income gap causes educational inequality.

35

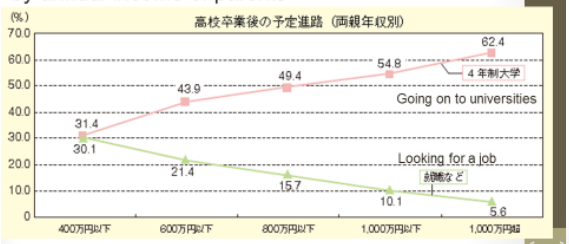
PROBLEMS IN JAPAN

- In higher education, the public educational burden rate is extremely low.
- the educational burden rate in GDP is low, in comparison to OECD average.

36

IN JAPAN

The course to take after graduation from high school by annual income of parents



Low Annual income of parents High

37

POLICY IN JAPAN

Scholarship system managed by an incorporated administrative agency.

The ministry of education give every university encouragement to take any step.

38

In this way...

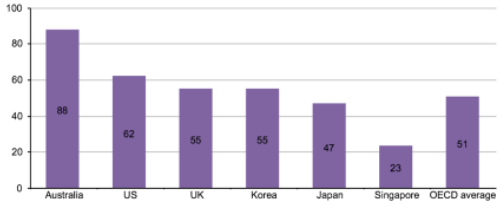
In Japan, the problem educational inequality is controversial.

Then, how about in Singapore?

The rate of continuing to university is lower in Singapore than in Japan.

39

The rate of continuing to university



What we want to ask you is

"Do you think we need educational equality in Singapore/Japan?"

41

The Topic of Today's Discussion

42

1. Why do you go to university?
2. Should we pursue the educational equality?

43

References

44

References

- http://www.chusho.meti.go.jp/koukai/chousa/chushoKigyouZentai9wari.pdf#search='%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E5%A4%A7%E4%BC%81%E6%A5%AD%E3%81%AE%E4%BD%8D%E7%BD%AE%E3%81%A5%E3%81%91'
- http://www.chusho.meti.go.jp/pamflet/hakusyo/h21/h21/html/k3120000.html
- http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/3865.html
- http://bar-exam.shikakuseek.com/new-bar-rate.html
- http://www.law-school.jp/ranking.html
- http://matome.naver.jp/odai/2137780242982114701
- Hutcheson, G. D. (2011). Ordinary Least-Squares Regression. In L. Moutinho and G. D. Hutcheson, The SAGE Dictionary of Quantitative Management Research. Pages 224-228.

45

Thank you for your listening!

46